

会津ワイド

清水の数 68カ所に

旧喜多方で調査研究

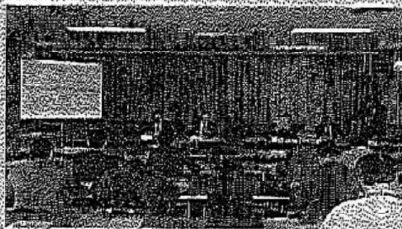
水資源が枯かな喜多方市上流に存在する清水の保全を再考する目的で、きたがた清水再生プロジェクト実行委員会と調査研究している。この法人調査隊の研究機関は十三日、同市の会津喜多方商工会議所で第一回ワークショップを開催。関係機関の調査研究チームが参加して旧喜多方市内に点在していたとされる約百六十カ所の清水が別荘は六十八カ所と減少していることを明らかにした。

地下水利用増加で半減

同市に主要河川は、河田の山地や丘陵地に囲まれ、多くの川が流れ込む。伊佐地区北部に位置する喜多方市の水資源は後述したように、半減に陥窮乏を成している。

160カ所の

調査研究チームの中間と入っている。同チームは中野町と喜多方市心部では道路の舗装や宅地内には田川、柳切川、田代川が通み、地下水を湛える川などが増え込み、多くの水漏れが起きている。多くの場所から水が湧き出ているの井戸で地下水を蓄積している。喜多方市を中心とした地下水を蓄積している。喜多方市を中心とした地下水を蓄積している。



喜多方市内の清水の実態などの調査結果が示されたワークショップ

理学博士は「田代川上流や入田村、柳切地区は清水が豊富だが、市街地に近づくにつれて湧き出たり湧き下りたり、地下水位が以前より下がっているところがある」と語った。

また地下水の利用状況は一九九二(平成三)年以前は年間千六百立方メートル、上水通用水が百中ダムから取水されようになつた九二年以降は年間千二百立方メートルで、上水利用はなくなつた分、上水用水や湧き出しの割合が増加している。同チームは今後、河川の流量変動や長期的な河川の汚染の調査などを行い、地下水利用実態の変化が与える影響などを調査。清水の保全を再考する。この調査は効果的か検討している。第一回ワークショップは十一月十一日(月)喜多方市の調査研究を